

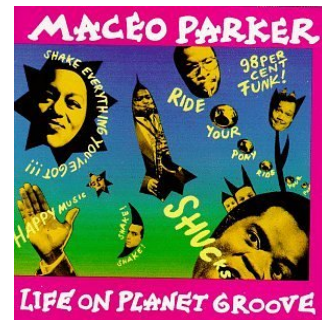
## 「ファンクであるということ」

第9期 渡邊 光平

“いい発表”とは、どんなものなのでしょうか。“いい演奏”とは、“いい飲み会”とは、“いい奴”とは、はたまた、“いい人生”とは、一体どんな様をしているのでしょうか。

これらの問いに対して、ゼミ、サークル等様々な経験を経て導きだした答え、それこそが『ファンク<sup>1</sup>である』かどうかであり、“いい〇〇”にはこの『ファンク』が必要不可欠なのです（真面目に書いています）。思えばこの大学4年間、小生が常に抱いていた疑問の代表格は、だいたいが上述したものでした。ゼミにおいてはいかにしていいプレゼンテーションをして聴き手を唸らせるか、所属していたバンドサークル（K.B.R. Modern Schacks）においてはいかにしていい演奏をして女の子にモテるか、プライベートな飲み会においてはいかにして場を盛り上げて女の子にモテるか、交友関係においてはいかにしていい奴と認識されて女の子にモテるか、そして、いかにして女の子にモテていい人生とするべきか。こうした高尚なことを考えながら、日々多感な学生生活を営んできました。しかし、学生・社会人にかかわらず、これらは私のみならず、おそらく読者であるあなたにとっても非常に重要な課題であるのではないのでしょうか。

答えは、実は意外な所に転がっていました。小生は平素よりブラックミュージック、特に、R&B, Soul, Funkといったジャンルの音楽を愛聴しています。その中でも、故Michael Jacksonが師として崇めたブラックミュージックの神、故James Brownの右腕として名を馳せたサキソフォニストであるMaceo Parkerの燃え滾るような名演を収めた作品『Life on Planet Groove (1992)』の冒頭曲“Shake Everything You've Got”の序盤において、Maceoが観客を煽るように言い放った一言“We'd like to do 2% Jazz, 98% Funky Stuff”。これです。ああ、これが、ファンクなのだ。元々Funk畑出身のMaceo (1992)はこのとき、グルーヴ<sup>2</sup>を生み出す98%の“Funky Stuff”に、たった2%ながらも、アクセントを加える意味での“Jazz”要素をあえて付け足しています。これは、人妻が不倫を正当化すべく「時に、人生にはスパイスが必要なのよ」と言い放つのにどこか似ています。調和を乱すことで、勢いが失われてしまうという考え方はもともとです。しかし、あえて調和を乱すことで、及第点ではあるがどこか物寂しい事物に“ファンク”が生じ、途端におもしろくなる。これこそ、“いい〇〇”の秘訣なのです。



Life on Planet Groove/Maceo Parker (EAN: 0033585502317)

<sup>1</sup> 本論においては、音楽ジャンルの“Funk”と、論点である“ファンク”をそれぞれ故意に使い分けている。

<sup>2</sup> グルーヴ/Groove: ある種の高揚感を指す言葉ではあるが、具体的な定義は決まっていない。語源はレコード盤の針溝を指す言葉で、波、うねりの感じからブラックミュージックを表現する言葉に転じ、数字だけでは割り切れないリズムの要素、リズムの感覚全体を指すことが多い。